
3 ~インフィニット・ストラトス・ブレイヴ~ 新たな月光のバトラーと蘇る伝説のバトラー

激突皇

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS・B～インフィニット・ストラトス・ブレイブ～ 新た

な月光のバトラーと蘇る伝説のバトラー

【ISBNコード】

978-4-86373-672-1

【作者名】

激突皇

【あらすじ】

突然死んでしまった少年はISの世界へ転生することに。そして彼が転生して十五年・・・彼の持つバトルスピリットのカードが突如ISに！？さらにクラスメイトのほとんどが女子のIS学園へ入学することに！ 果たして彼の運命は！？ そして未来を救つた伝説のカードバトラーもこの世界に・・・？

俺が目を覚ますとそこは廻して飛びの白い世界だった
わけもわからずキョロキョロしていると目の前にこれまた真っ白な
衣装をまとった女性がいた

「あんたは・・・」

「私はあなたの言葉で詠つてこの神とこのものですが

「へ？ 神様？」

はたしてどういう状況なのだろうか

「まずはあなたに謝らなければならぬ」とあります

「謝る・・・ってなにを？」

「あなたをこいつらのミスで死なせてしまったことです

「・・・、はあ！？」

死んだ？俺が？

「マジか！？ 俺、死んだんか！？」

「はい、申し訳ありません・・・」

「マジか・・・俺、たくさんの息子と孫に囲まれて安らかに死にたかつたのに・・・

「それで、お詫びといつてはなんですかあなたに提案したい」とがあるのですが

「ん、なんだ・・・?」

「俺、天国にいけるのかなあ・・・

「もしあなたが望むなら、あなたをお望みの世界へ転生させられます」

「なん・・・だと・・・!?」

「たとえ望まなくとも天界と呼ばれる場所で上級のもてなしをさせていただきますが」

「マジか、俺が望めば俺の好きな世界へ転生できて、望まなくともいい暮らしができるってのか

「では、どういたしますか?」

「うーん、いい暮らしひのもいにがやつぱ・・・

「・・・よし、俺を別の世界へ転生してくれ

「わかりました、ではどの世界へ転生しますか」

「そうだな・・・つて死ぬ前の記憶がなんかぼやけてるんだが」

「それはおそらく頭を打つて亡くなつたからだと思いまよ」

「んじゃ、どうすりゃいいんだ」

「だったら、これが役に立つでしょうか」

すると俺の足元にバッグが現れた

「これは、俺のバッグ?」

「はい、あなたが死ぬ前に持つていたものですそれらを参考にして
はいかがでしょうか」

とりあえず中身を出すか

ええっと、これはPSP、ソフトはモンハンか、实物を見ると案外
思い出せるな。他は、バトスピ、ラノベのHJとロウきゅーふ！。
この中から選ぶしかないか

まあ、モンハンは・・・モンスターおつかないから除外、ロウきゅ
ーふは・・・犯罪者予備軍になりそだだからバス

となると後はHJとバトスピか・・・うん

「・・・よし、決めた」

「ではどの世界にするのですか」

「HJ、インフィニット・ストラトスの世界だ」

「E.S.……わかりました、では自分のE.S.をどうするか決めてください」

「E.S.か……どうすつかな……」

なんとなくバトスピの『テッキからカードを取り出すとそれは

「……ストライク・ジークバルム」

偶然買ったパックに入つたXレア、カッコイイし使えるなと思つて入れて、今となつては俺の最高の相棒のカード

「なあ」

「はい、何でしょ」

「こいつにしたいんだが、できるか?」

そう言いカードを見せる

「はい、できますけど」

「なら、俺のE.S.はこいつ、月光龍ストライク・ジークバルムだ!」

「わかりました、では今からあなたをE.S.の世界へ転生させます。準備はよろしいですね」

「ああ、こいつでもOKだ」

「それではあなたの第一の人生に祝福がありますように・・・」

その言葉を最後に、俺の意識は消えた

転生（後書き）

はい、てなわけで始まりました。
バトスピ×ISの異色のクロス、それぞれファンの層が違かつたり
しますが自分がやりたかたつからやりました。後悔はしてません

序章 運命の事件（前書き）

しばらくは主人公がIISを手に入れるまでの話となります
それでもOKならどうぞ

序章 運命の事件

二月某日

この俺、「風間 月光」がこの世に生まれて早15年と半年、進学する高校も決まり後は卒業するのを待つだけとなつた。そんな俺は残り少ない中学生生活をエンジョイするため友達と遊び倒していた

「月光、今日の放課後はどうするつもりだい」

「こつはその友達の「三沢 一樹」、小学校からの付き合つだ

「ん？ そうだな、たまにはゲーセンででも駆り出すか？」

「ふむ、それもいいけど制服のままはまずいんじゃないかな」

「あー、そつか。 んじゃどうすつかな・・・」

「こつん家はこの前、たばつかだしゲーセンはダメとなると・・・うーん・・・」

「ちよつとあなた達」

突然後ろから声を掛けられる

「なんだよ」

「レクレーションの準備に必要な道具を買ってきなさい」

そいつらは来週行われる卒業祝いレクレーションの実行委員だつた

「なんで俺たちがそんなことやんなきゃなんねえんだよ」

「なによ、文句あんの?」

「文句も何もそんな実行委員の仕事だらうが」

「フン、男の癖に口」たえしてんじゃないわよ」

一人の言葉に他の実行委員の奴らもそつだそつとか言つてやがる

・・・・・たく、また女尊男卑かよ

大天才と言われている篠ノ之 束が女しか動かせない IISなるものを創つたおかげで女が男より強いという男尊女卑ならぬ女尊男卑が当たり前の世の中になつてしまつた

一昔前は男女平等とか騒いどいていざ力を持つたらこれだ、全く気に食わねえ

「まあまあお嬢さん方、その仕事は僕がやるからどうか怒りを抑えてくれ」

「フフン、三沢は物分りがいいわね。 いいわ、三沢に免じて今は許してあげる」

「ありがとう、では僕達はこれで」

去り際に一樹は実行委員の奴らに微笑む。 すると一部奴らが三沢君・・・とかつぶやいていた

ここで言つておぐが一樹は女好きだ。それでいてなかなかのイケメンだから女子には昔からもてていた。

「・・・・・」

その一樹に続いて俺も無言で教室から出て行く

「つたぐ、あんな奴らの言つ事なんて聞かなくていいだろ？がよ

俺は一人でもやることがないので一樹と一緒に買出しに来ていた
「そつはいっても女の子達は僕達のために頑張っているんだ、その手伝いをしても悪い気はしないだろ？」

「お前の場合は動機が違つだろ？が

女好きの幼馴染にツツ「ミ」を入れつつメモに書かれているものをかごに入れていく
まあこいつの言つてることも間違ひじやないんだがあの態度が気に食わないんだよな・・・

もつと普通に頼めば俺だって行くつつの

「それで終わりだ、後は会計」・・・

『お密様! 今すぐここから非難してください・・・うわああ!』

「なんだ?」

突然アナウンスが流れたと思ったら途切れた。 しかも非難しろって

「今のアナウンスって・・・」

一樹も異変に気が付き俺と顔を合わせる
そしてアナウンスがまた流れた

『この店にいる密기도よく聞け! この店は我々が制圧した!』

「なに?」

「制圧・・・?」

そのアナウンスに俺達だけでなく周りの客も同様していた。 そのとき

ドーナツ

銃声が響き同時に建物が揺れた

客達は一瞬でパニックになり店から出ようとした

「痛! おい、押すんじゃねえ!」

「月光！僕たちも逃げよう！」

だが再び銃声がして出入口が崩れた

「なー？」

そしてそこにはエリを装着した五人ほどの女性が立っていた

「ちつ、少し出ちまつたか。まあいい、残った奴らを人質にするぞ」

彼女らは俺たちに武器を向けつつ言った

「くそつ、なんなんだよ！」

そのときの俺は知りもしなかった、この事件が俺の運命を変えることになるなんて

序章　運命の事件（後書き）

てなわけで序章です

まだ月光は自分が転生したということとは知りません
次回あたりで思い出す予定です

序章　円の泡盛（前書き）

泡えます、月光が
てなわけで、どうも

序章 月の咆哮

俺たちは今ライフルを突き付けられ抵抗できない状態にあるつまりこの店を制圧した奴らの人質になつていてる状態だ

「なんなんだよ、こいつら」

「さあ、僕に聞かれても」

「そー」！静かにしてな！」

くそつビツ元がしねえと

「よし、警察が来たか、ならこの国にいるHISを動かした男を連れて来いと伝える」「

・・・なに？

「おい一樹、HISを動かした男ってどういうことだ？」

「知らないのかい？」の前一コースでやつてて大騒ぎになつていていたよ

「いや、俺一コースとか見ねえし」

俺たちは奴らに聞こえないよう小声で話した

「まあなんにせよ彼女達の目的はそれのようだね

「ISを動かせる男か……よし

「一樹、耳貸せ」

「？」

「…………」

「な!? 本気かい!?」

「やいへんやることやー!」

「…………もつ一度聞くが本気かい?」

「ああ、これなら少なくともたくさんの人人が助かるはずだ」

「ふ、頼らしこと聞えぱらしけ。わかつた、僕も手伝つよ」

「ああ、頼んだぞ」

「おー、あんた」

「なんだ」

見張りのちょっと丸めの女に声を掛ける

「そのＩＳを動かせる男って奴の顔知つてんのか？」

「それはリーダーが知つている、それがどうした

・・・案外あつさり言つてくれたな、よし

「そいつは俺だ・・・って言つたひどいするへん」

「なに！？」

よし、引っかかった！

「あんた、それは本当か！？」

「ああ、そうや。俺がＩＳを動かした男、織斑一夏だ」

そのせりふに他の見張りや人質も注目した

「おー！今すぐにリーダーに知らせる！」

「そつ言い一人がここから離れ、後の二人も俺に集まってきた

「ふつ、まさか人質に紛れていたとはね」

「ちゃんとリーダーに教えてもらつておくんだつたな」

そう言い一樹にアイコンタクトを取る、すると一樹は顔を行動に移つた

(頼んだぜ)

俺はそのまま見張りの奴らの気を引き付けた

「喧さん、今から言つことを静かに聞いてください
僕の言葉に人質の人たちは注目する
「彼女達が僕の友人に気を取られているうちにここから逃げましょ
う
そういうと彼らはびわついた

「静かに、気づかれます。見張りが少ない今なら逃げられるかも

されません、この隙に元から逃げましょ」

僕の提案に彼らも頷いた

「はじめです、音を立てず慎重に

僕の誘導にみんな着いてきた、よし、これなら・・・

（よし、うまくやつてるな）

俺がここからの氣を引き一樹が客を逃がす、なんとかうまくいって
るな

「あのときせ俺も驚いたぞ、なんせ一きなりEVAが動いたんだから

「へえ

「あんたも大変ねえ」

・・・にしてもこいつら言ひちゃ悪いがアホか？人質と世間話して
るや

まあおかげで作戦がうまくいってるんだが・・・

「おい！貴様ら何をしている！？」

振り返るとさつき呼びに行つたやつが一人の仲間を連れて戻つてきて
ていた
しまつた！もう戻つてきやがつた

「くっ、みんな！走るんだ！」

「逃がすな！やれ！」

「させらるかー！」

「ぐつー！」

逃げている人たちに銃を向けた女に俺はタックルをかます

ダメージはなくとも突き飛ばすことはできるはずだ

「今だ、行けえ！」

その隙に人質は逃げる、だが

「あやあー。」

一人の女の子が転んでしまいそれをさつきの丸めの女が捕まえてし
まつ

「いやーはなしてー。」

「どうします？ もうこの一人しかいませんが」

「ふん、 いないよつはマシだら。 それよつさつき面ついた奴はど
うした」

「あ、はい、 こいつですー。」

さつあ世間話をしていたもう一人の女が俺を指差す

「・・・なんだと？」

「だからこいつですって」

「・・・バカヤロウー！ 全然違つじやねえかー！」

そうこうでリーダーらしき女はゲンコツを叩き込んだ

「痛あー。」

「なんだつてー？ 」

いつせいに俺に注目してきた

「ちえ、ばれちまつたか」

「フン、なかなか肝が据わってんじゃないか。だが、相手が悪かつたなあ」

そう言い俺の顎を掴み上げる

「だが人質のほとんどは逃がせたぜ」

「なるほど、それが狙いか、だが一人残しちまつたなあ

さつき捕まつた女の子を掴み上げる

「やあ、たすけて！おかあちゃん！」

「止めろー！その子は離してやれ！」

「黙りなー！」

「ぐううー！」

「ぐう・・・」

腹に蹴りが入つた

「あんたちは人質なんだ、立場を理解しな

「ぐう・・・」

俺は倒れこみ奴らを見上げる

「お前達、こいつを痛めつけてやるな」

その言葉に他の奴らが俺に近づいてくる

「悪いね、あんたとの世間話楽しかったけどリーダーには逆らえないと」

さつきの丸めの女がそう言つ、くそつ、こじまでなのか・・・
女の子の叫びや奴らの声がぼんやりしてきた

(ちくしょ・・・俺は女子一人助けてやれないのかよ・・・)
意識が遠のく・・・もつだめかと思つたそのとき

『月光!』

声が聞こえた

『俺を使え!』

誰だ・・・お前は

『お前のポケットの中に入つていいの!』

俺の・・・ポケット?

ポケットに手を入れるとそこにはカードらしきものが入つていた
それに触ると突然頭の中に何かが流れ込んできた
これは・・・俺の記憶?

そうだ、俺はこの世界に転生したんだ

『それを持って俺の名を呼べ！』

お前の名・・・

『俺の名は・・・』

「月光龍・・・ストライク・ジークバルム！」

すると俺の体になにかが装着された

「な、なんだ！？」

「ひいきなり叫んだと思つたら……うわあ！」

「きれい・・・」

「ハサウエイの本を読むのが何よりも好きだ……」

俺は一度抱え、その後のこととは覚えてない

だが気が付くと奴らは全員倒れていて俺もその場に倒れた

序章 月の咆哮（後書き）

これで序章終了です

次回はついにIJS学園に入学します

なんやかんやで入学です

小説本文

あの事件の次の日、新聞にはこのような記事が書かれていた

『ISを動かす少年、二人目の出現か！？』

先日ホームセンターにてISを装着した五人のグループがその場にいた客を人質に取り立てこもるという事件が起きました。その際、人質の一人だった「風間月光」さんが友人の「三沢一樹」さんと協力し、人質を逃がした後、倒れているその五人と人質の女子一人と一緒に発見されました。その女の子の話によると風間さんはISを装着し五人を一掃しその場に倒れたようです。警察は、この五人を逮捕し風間さんが目を覚まし次第詳しい話を聞く方針です。

そして時は流れ四月

「つたぐ、俺の受験生活はなんだつたんだ・・・」

学園へ向かう電車の中で俺はそつづぶやく、あの後意識を取り戻した俺は警察をはじめ、さまざまな機関から事情聴取をされ、国から「EJSを動かした二人目の男」ということでEJS学園に入学よつて指示された

入学金などもろもろ国が負担するとか何とかで俺がお世話になつている家の人たちは二つ返事で了承した

まあおつちゃん達にはお世話になりっぱなしだし、負担を減らせるんだからしううがねえよな

それから俺は一般とは遅れて試験を受けた、あくまで形だけだったのらしいのだが俺は余裕で合格ラインを超えて、おまけに実技の教師との対戦も圧勝した

あのときの教師達の顔はしばらく忘れられないな

「とにかく気を引き締めて以下ねえとな、なんせ・・・」

そう言いながら電車の中を見る

「・・・俺とあの初めてEJS動かしたつて奴以外みんな女子なんだからな・・・」

入学式が終わり教室に入ると俺は気が重くなつた

覚悟はしてたがやつぱきついな・・・

隣の生徒以外全員女子、しかもその全員が俺と隣の生徒に注目しているのだから

うう、早く担任来てくれー

そう願つていると教師が入つてきた

「全員揃つてますね、それではホームルームはじめますよ」

それからこの人、山田真耶先生がホームルームをはじめ、それから自己紹介となつた

そして隣の生徒の番となつた

「ええっと、織斑一夏です、よろしくお願ひします」

へえ、なかなかイケメンじゃねえの

そんなことをぼんやり考えてていた俺は気づかなかつたが後ろでは女子達がもつと何か言わなかつたと期待していた

「・・・以上です」

すると女子達は壮大にずつこけた、そしていつの間にかいした教師に出席簿で殴られた

「げつ、千冬姉！」

再び殴られる

「学校では織斑先生と呼べ」

その光景に俺は啞然としていた

「あつ織斑先生、もう会議はよろしいのですか？」

「ああ、山田先生。クラスのことを押し付けてすまなかつたな」

「いえ、副担任ですから」

そしてその教師が教卓に立つ

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。君達新人を立派な使い物になる操縦者に育てるのが私の仕事だ。」

その言葉に教室が黄色い声援で震える

つつ、これが女子校ならではのやつか・・・

俺は耳を押さえ未経験の出来事に自分流に考察した

「…毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。それとも何か
？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

苦労してるんだな、この人も

俺は心の中で同情した

そしてホームルームも終わり休み時間となつた

「よハ、たしか風間だつたよナ

俺が一息ついてると隣の席の一夏が話しかけてきた

「同じ数少ない男回士、仲良くなつせ

そつ言い手を差し伸べる

へえ、なかなかいいやつじやねえの

「ああ、ハハハハよハシベ。 それと月光でいいぜ、俺も一夏つて呼ばせてもらうがな」

俺もその手を握り返し答えた

「さつか、よろしくな月光」

その光景に他のクラスから見に来ていたのも含め女子達が盛り上がり

つた

・・・なぜだ？

「一夏」

一夏に一人の女子が話しかける

「篝」

「ちょっといいか」

そう言わると一夏は俺のほうを向く

「ん？俺のことは気にすんな、知り合いなんだ」

「ああ、悪いな」

一夏は俺に軽く謝ると篝と呼ばれた女子と教室を出て行く

「いよいよ～」

俺は手をひらひらさせながらつい次に行われる授業の準備をした

「・・・であるわけです。ではここまで質問のある人？」

一通り説明した山田先生は俺たちに聞いた
一応参考書眺めておいたからあらかた判つた
ぱっと隣を見ると一夏がそわそわしていた、なんだ？便所か？
それに気づき山田先生が

「織斑君、何かありますか？」

「あ、ええっと・・・」

一夏はいこゝもる

「質問があつたら聞いてくださいね。なにせ私は先生ですか？」

そういう先生は胸を張る、・・・やつぱでけえなあ

「先生ー。」

「はい、織斑君」

嬉しそうに答える、・・・本当に教師なのか?」の人は

「全然わかりません」

なん・・だと・・!?

話を聞くと参考書を捨てたらしい・・・マジか
一夏はもぢりん織斑先生に殴られた

「再発行してやる、だから1週間で覚える」

「い、1週間での厚さはひとつと.....」

「やれ」

「はい・・・」

有無を言わせない迫力で一夏は頷いた、しゃあねえ、後で教えてや
るか

そして再び休み時間

「んでこれはいつなるわけだ」

「な、なるほど」

俺は一夏にさつきの内容を教えていた、そつしていると

「ちよつとよろしくて?」

「ん?」

「へ?」

突然呼ばれ振り向くと金髪の女子がいた

「まあ!なんですの、そのお返事。私に話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度といつものがあるんではないかしら?」

「…なんだ?」

「悪いけど俺、君のこと知らないし」

「まあ、私を知らない?」のセシリア・オルコットを?イギリス代表候補生であり入試主席のこの私を!?」

「つひとおしいな

「あいにく、んなことこ興味はないんでね

一夏が何か言おうとしてたが先に俺が言つ

「興味がないですつて!?ビコまで失礼なの貴方達は!-」

「なあ、一つ聞いていいか

「なんですか!」

俺が言つたことでだいぶ立腹のようだ

「代表候補生つて、なんだ?」

その言葉に金髪の顔は啞然としていた

「代表候補生つてのは、国家代表のIJSの操縦者を決める代表選抜に参加する事ができる人のことなんだよ」

俺はいつか一樹に聞いたことをつる覚えで話す

「つまり?」

「まあ、ヒリートつて奴だ

「そう！エリートなのですわ！」

あ、復活した

「本来なら私のような選ばれた人間と貴方達のような者がクラスを同じくするだけでも奇跡・・・幸運なのですわ。そのところをもう少し理解していただけないかしら？」

「そうか、そいつはラッキーだ」

「貴方、この私をバカにしますの？」

「いや、そんなことはないぜホントラッキーだわー」

俺と一夏の棒読みに金髪の顔が真っ赤になつていく

「大体、貴方達はエスについてなにも知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね！貴方達二人だけが男でエスを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思つていましたけど、期待はずれですわ！」

「あなたのイメージを勝手に俺らに期待すんな

「くつ・・・まあでも？私は優秀ですから、貴方達のような人間にも優しく接してあげますわよ。わからないことがあれば泣いて頼まれたら教えても差し上げてもよくってよ。なにせ私は入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「いや、月光に教えてもらうからいいし、それに俺も倒したぞ、教

「冒」

「・・・へつ？」

「だから倒したって、でもあれは倒したといつか突っ込んできたのをかわしたら壁にぶつかって動かなくなつたんだけど」

「そ、そんな・・・あ、あなたはどうなんですか？」

「普通に倒したが？」

そつ答える俺たちに金髪はまた啞然とする

「そ、そんな・・・私だけと聞いていましたのに・・・」

金髪が啞然としているとチャイムが鳴つた

「ハ、これで済んだと思わないでくださいませー。」

そう言い残し金髪は立ち去つた

なんなんだよ、こいつは・・・そういうや、あいつの名前なんだつたつけ

考えてみると山田先生が入ってきて授業が始まった

セシリ亞をちょっといじめてみました（オイ）
そんなわけで次は原作通りセシリ亞と決闘の約束をします

予告じおつこじコトアと決闘する」とことなつます
では、じつも

「さて、この時間は実戦で使用する装備について説明する」

「一時限目の授業までは変わらず二時間目は織斑先生が担当していた

「その前に、再来週に行われるクラス対抗戦の代表生を決める

「代表戦か……ちとメンドソウだな

「自薦他薦でもかまわない、誰かいないか」

推薦式となると……

「はい！織斑君を推薦します」

「私も賛成です！」

「私は風間君を推薦します！」

「風間君に一票！」

「……まあそういうわな

「いや、いや、俺そんのやらないぞ」

「よし、俺も今から辞退を……

「ちなみに他薦されたものは拒否権はないと思え」

「……マジか

「他にはいないか、ならば投票にするわ」

投票で決められるのはいやだな、よしなりば一夏とじやんけんで漢の真剣勝負を・・・

「待つてくださいー納得がいきませんわーー！」

・・・つてまたこいつか、名前なんていつたっけ？

「そのような選出は認められません！―男がクラス代表だなんてい恥騒しですわ！―このセシリ亞・オルゴットにそのような屈辱を一年間も味わえとおっしゃるのですか！？」

ああ、オルゴットっていうんだ。てがまた好き勝手言つてんな・・・
・まてよ、ここであいつを代表者にしちまえば俺がやりすに済むじやねえか！ナイスアイディーアー！よし

「んじゃお前にゆず」

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけない」と自己にとつては耐え難い苦痛

・・・あ？

「イギリスだつて大したお国自慢無いだら。世界一まことに料理で何年覇者だよ？」

一夏も頭にきたらしく言い返す

「なんですか？イギリスにも美味しい料理は沢山ありますわー！貴方、私の祖国を侮辱しますのー？」

「つーか先に日本を馬鹿にしたのはてめえだろ？が、あん？」

「俺も少しキレてるから喧嘩腰に言つ

「日本の代々続く歴史や文化を知りもしねえで日本を罵罵すんじゃねえ。それともなにか？先進国様は見た目だけで判断する中身のねえ国なのか？」

俺達の言葉にオルコットはフルフルと震え

「決闘ですかーー！」

俺達に宣戦布告した。今気づいたが織斑先生は一ヤ一ヤしていた。

・・楽しんでんな、あくじょ

「いいぜ

「ああ、こっちの方が話が早い」

織斑先生は置いといて俺達は宣戦布告を受けた

「言つておきますけど、わざと負けましたらわたくしの奴隸にしますわよ」

「誰がんなことするか」

「で、ハンデはありますか？」

「あ、強気だねえ、嫌いじゃないぜそこいつの

俺達がそう言つてるとオルコットは嘲笑をし、クラスのやつらは笑い出した

「一人とも本氣～？」

「男が女より強いなんてエレガできる前の話だよ」

「男と女が戦争したら三日も保たないって言われてるのに」

女子達の笑い声に一夏は戸惑つていた。 ああ、なるほどな

「確かにそうかもな、だがそれは俺達が弱いつつーことにほんとうにはずだぜ」

俺がそう言つと笑いがピタリと止まった

「まあそういうことだ、この勝負、ハンデもなんもいりねえ真剣勝負といこうや」

そつ言いながらおれはオルコットに拳を突き付ける

「話はまとまつたな。 それでは勝負は一週間後の月曜、放課後、第3アリーナで行う。織斑、風間、そしてオルコットは各自用意をしておくよ。それでは授業を始める」

織斑先生の言葉に俺達は席に着き授業に入った

授業が全て終わり、俺は一夏の元へ向かった

「一夏、お前特訓とかはどうすんだ？」

「やうだな、ビリするかな

考えてなかつたか

「なら俺とやるか？ 工事動かしたのはお前の方が先だが俺はいろいろと場数踏んでんだ」

「ホントか？ じゃあ頼む・・・」

「一夏」

横から一夏が声を掛けられる

「ん？ 篠、ビリした

篠って・・・ああ、れつせのあいつか

「お前、決闘の特訓はどうするんだ、なんなら私が・・・」

「ああ、大丈夫だ、月光と特訓するから」

「え・・・」

一夏の言葉に篝と云つ女子は黙り込む・・・」につ、もしかして

「いや、でも・・・」

「そういうわけだから心配しなくていいぜ」

「うう・・・」

・・・やっぱり、お前も罪な奴だな一夏よ。・・・しようがねえな

「お前も一緒に特訓しねえか?」

「「え?」

俺の提案に一人はこっちを向く

「だから、ええと、篝だけ?お前も俺たちの特訓に付き合わないかつて言つてんだ」

「あ、おい月光

「わ、私でいいのか

「ああ、むしろお前だから頼むんだ」

「私……だから？」

筈は俺の言葉の意味がわからないようなので説明する

「つまり、一夏のことはお前の方が知っている、だからいろいろサポートできると思うんだ。というわけでお前に手伝って欲しいんだが、お前にも都合があるだらうし無理強いはしねえが」

「そ、そ、うか、そ、う、言、わ、れ、た、ら、手、伝、う、し、か、な、い、な、う、ん、」

「却下だ」

「ええ・・・」

俺と笄の被つたセリフに一夏は諦めたようでもうなだれた
うん、笄とは結構気が合ってそうだな。 そういうや苗字なんだつけ
・ま、いつか

「んじゃ、アリーナの使用許可の申請していくから先行くぜ」

そして俺は教室から出ようとする、ついでに簞に耳打ちする

「お膳立てしたんだ、しつかりやれよ」

篇は顔を真っ赤にしていたが気にせず走つていつた

・・・とつあえずここまでの出来事をやつと話そう

まず使用許可の為職員室の前についた俺に一夏からメールで剣道場で特訓すると来たので引き返して剣道場に向かつた

そして剣道場に着くと一夏と笄が早くも手合させをしていた、笄はなかなかの実力者でこれは期待できるなと思ったのも束の間、気づくと一夏は伸されていた

話を聞くと一夏と笄はかつての道場仲間で昔は一夏もそこそこの実力だったらしいのだが三年間帰宅部だったおかげでその腕は鈍つていた

そんな一夏を笄は一から鍛えなおすとかで俺は仕方なくしばらくな人で特訓することになつた

だがこんな時間になつては使用許可も取れなくて、これまた仕方なく家へ帰ることにしたのだが・・・

以上回想終わり

「で、なにか用ですか、山田先生」

そして帰らひつとじて山田先生に呼び止められた

「はい、えつと風間君の部屋が決まつたのでお伝えしようと

「へ？ 僕白伝いのはずじゃあなこんですね？」

「いえ、風間君と織斑訓には急遽学園の寮で生活してもらひたいと
なつたんです」

「なん・・だと・・・・！？」

「そんなことつてあるのか？ まあでもこちこち家から來るのも面倒だ
つたしこっか

「それでは」案内します

「でも荷物とかは・・・」

「それなら心配はいらん」

すると山田先生の後ろから織斑先生が現れた

「お前の荷物は家の方の協力で全て寮に運んだ」

「マジか、おっしゃん・・・」

「それでは山田先生」

「はい、風間君、いらっしゃりです」

そんなこんなで俺は寮住まいになつたのだった
部屋に向かう途中女子が俺を見て目を光らせてたが……なぜだ?

「102号室が風間君の部屋です」

「はい、わかりやした」

「これが鍵です、それでは私はこれで」

「はい、ありがとうございました」

俺が笑いながら礼を言つと山田先生は顔を赤くして走り去つた……
なぜだ?

まつ、とつあえず荷物の整理でもすつか

俺は部屋に入り荷物の整理を始めた

「とまあこんなもんか」

一通り荷物の整理が終わつた、つーかホントに全部あんでやんの。プライバシーもあつたもんじやない・・・

「あとはこれだけか」

俺の荷物とは別にもう一つ小さな箱があつた、なんだろうか、開けてみるか

「・・・これは」

その中には俺の好物の一つ、おつちやんの餃子が入つていた。そ

して手紙も一緒に入っていたので読んでみる

『月光、これ食べてしつかりやんな 坂田家一同よつ』

お世話になつた坂田家からの選別に田頭が熱くなる

「おひちゃん、舞さん、兄貴・・・」

後で夜食にでも食おう、なんかやる気出できたな。

とりあえず晩飯まで時間はあるし少し走つてくるか、敷地内なら問題ないだろ

そつ思いつきじつとしていられなくなつた俺は着替えもせず部屋を出た

「つと、よつ」

「む？ 風間か」

部屋を出ると簞に出てくる

「一夏の特訓は終わつたのか」

「ああ、もう少しかかりそうだがな」

皮肉に言つてゐるが顔はつれしつれだった

「そつか、まあ俺は氣長に待つた、お前の邪魔はしたくないからな

「なつー?」

筈は顔を真っ赤にした

「わ、私は一夏のことなんて・・・」

「ん？俺は特訓のことを言つたんだが」

「>?」

篇の言葉に俺は一ヤ一ヤしながら言った

「……はつ！ 貴様、謀つたな！」

ハハハ 引っかかるたのはお前だろ

卷之三

すげえ悔しそうだな、からかうのはじれぐらいいじぐらか

「まあ、冗談はさておき俺は応援してるぜ」

一
風間
・
・
・
」

「それと、俺のことは月光でいいからな」

・・・ああ、わかつた、私も幕でかまわない

「あこが、改めてよひへな」

「ヘンツウノハジメハシテ」

そして俺と篠は握手を交わした

「んじゃ、俺はこれで。 またな」

「ああ」

俺は篠と別れ、走りに行つた

その後帰つてくると隣の部屋のドアに穴が空き、一夏が土下座しているといつ謎の光景を見た・・・なぜだ？

次の日の朝食の場で一夏に聞いたところ 一夏が部屋に入り荷物をいじつていると同質となつた篠がシャワーからバスタオル一枚で出てきて一夏を追い出した際、竹刀でドアに穴を空けたんだとか。 ・・・マジか、実力者とは思つてたがまさかここまでとは・・・ そんで一夏は篠の機嫌を直す為、土下座していたといふことらしいなんつーか、前途多難だな。 頑張れ、二人とも 俺は心の中で一人の今後を応援した

新生活編 決闘（後書き）

今のところおきます
月光と篠のフラグは立ちません
篠は一夏を思い続ける方針でいきますんで

新生活編 ブレイブ（前書き）

いよいよ月光&一夏V.Sセシリアです
そしてついに・・

そして俺達とオルコットの決闘が決まった日から一週間が経ち、ついに対決の日を迎えた

「んで、お前の専用機はいつ来るんだ?」

そんな俺達は今アリーナの控え室、今日一夏の専用機が来るということになっていたのだが未だに来ておらず待ち忽けを喰らっていた

「あ・・・俺が聞きたいよ

そつ言い頃垂れる一夏、そのとき山田先生がひた走ってきた

「織斑くーん!」

息を切らしながら一夏の前に立つ

「大丈夫ですか、先生」

「はい、それより来ましたよー織斑君の専用機ーーー!」

やっと来たか、そう思つてると後ろから織斑先生と一夏の専用機らしき物が来た

「織斑急げ、相手も待ちくたびれているぞ」

ぱっとオルコットの方を見ると腕を組んで浮いていた

「これが一夏の・・・専用機・・・」

筈はその白いHISを見てつぶやいた

「はい、これが織斑君の専用機、『白式』です！」

「白式・・・」

一夏は白式と呼ばれるHISに触れた

「・・・理解できる、これが何のためにあるか・・・分かるー。」

ビーナスは揃つたようだな

「えいや、行くとするか、あちらさんも待つてない」とだし

「お、ついで前のおひるがくするんだ?」

あ、そういうのまだ見せてなかつたつけ

「俺のHIS・・・いや、相棒はこいつだ」

俺は腰に着けていたカードケースからカードを一枚抜き出す

「カード・・・?それってなんなんだ?」

「だから俺の相棒だつて、まあ実際に見せた方が判りやすいか

「?」「?」「?」

俺の言葉が理解できず、一夏と筈は首を傾げる

「久しぶりに行くぜ、相棒！」

そしてカードを握り締め、セリフを叫ぶ

「貫け、闇夜に光る月の牙！ 月光龍 ストライク・ジーク・ヴァルム
！」

そう叫ぶとカードのストライク・ジーク・ヴァルムが光だし、俺の体に
I.S.として装着された

背中には白い機械風の翼、手足には鋭い爪、頭の鼻から上にはスト
ライク・ジークをイメージしたマスクが着いた

「なつ！？」

「カードがI.S.に……？」

「ほつ……」

「これが風間君のI.S.……」

その光景に上から一夏、筈、織斑先生、山田先生が言った

「んじや、お前も早く装着しな」

「あ、ああ」

一夏はまだ信じられないと言つ顔をしていた

「まあ、詳しことは後で話すよ」

「ああ、わかった・・・」

一夏は無理やり納得したよつて白式を装着した

「さあ、行くぜ」

「おひ、それじゃあ篝、行ってくれ」

「ああ、行ってこ」

篝に見送られ俺達はオルコットの元に向かった

「あら、逃げずに来ましたのね」

「当たり前だ、んな」としたら男が廢る

オルコットの挑発にしれつと戻る

「それより本当に一対一でやるのか」

オルコットの提案した対決方法に一夏が確認する

「ええ、構いませんわ。私にとつて貴方達程度一人も一人も同じですわ」

余裕を見せるオルコットに俺は言い返した

「まあそりゃうな、お前の専用機は一対多の戦いに向いてる訳だし」

「あら、よく存知で」

「相手を知るのは戦いにおいて基本中の基本、少し調べさせてもらつたぜ」

「お前、いつの間に・・・」

「お前が籌に絞られてるうちに部屋で調べたのや」

俺の備えに一夏は感心していた

「さて、そろそろ始めようぜ」

そう言って俺は構える

「いいですか、一度と逆らえないよう徹底的にやらせていただきますわ」

「やうかよ

一夏とオルコットも構える

「さあ、踊りなさい、私、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でるワルツで！」

そう言つとオルコットが武器のビライフルで攻撃してきた

「一夏ー。」

俺の言葉に頷き一夏は俺の後ろに下がつた

「悪いが俺は・・・」

そして俺は爪を使ってビームを弾いた

「上品な踊りよりブレイクダンスとかの方が好きなんだよ」

腕を振り、オルコットを鋭い目で見た

そのオルコットはビットを展開して再び攻撃態勢に入つた

「27分・・・初見でここまで戦うとは、褒めて差し上げますわ」

「やつやぢうむ

「一夏は多少息を切らしながらひりひり言つた

「ここまでは作戦通りだな」

「俺は一夏の隣に移動しそう言つた

俺達の作戦、それは一夏の専用機が決闘の田に届くところとを聞いてから立てたものだ

ISはファーストシフトなるものがあるらしく、それが済むことで初めてISとして完成するらしい

それを知った俺は一夏にある提案をした、それは

「ああ、月光が防御で俺が攻撃、おかげで俺のシールドエネルギーもまだまだ余裕だぜ」

そう、防御性能に優れたストライク・ジーク、それを操る俺が攻撃を防ぎ、一夏が隙を見て攻撃するという単純かつ確実な作戦だが俺も全部防いだわけでもなく多少のダメージを負つており、逆にいくつか攻撃を当てたとはいえファーストシフトの済んでいないISの攻撃によるダメージは微々たるものでオルコットはまだ余裕

の表情を見せていた

「だが流石にそろそろ決めたいところだぜ」

「残念ですがそれはいつのセリフですか」

「そう言ひたいで俺に攻撃してきた

「それはもう通じねえぜー」

俺はまた爪でビームを全て弾いた、ビットは戦いながら少しづづ破壊していくので防ぐのが楽になっていた、そしてその隙に一夏が突っ込む

「もうひつたーーー！」

だがオルコットはにやっと笑い

「それは・・・こいつのセリフですわー」

するとあの機体からミサイルが発射された

「一夏あーーー！」

一夏は煙に包まれた

「一夏……」

対決を見ていた筈は一夏がミサイルを受けたのを見て心配そうな声をあげた

その隣で千冬が鼻を鳴らした

「ふん、機体に救われたな、馬鹿者め」

だがそいつ千冬は笑っていた

「さあ、後は貴方だけですわ」

一夏を倒したと確信し俺にライフルを向けていた、だが

「やつと来たか！」

煙が晴れるとそこには先ほどまでの血とは比べ物にならないほどの

純白のエスに包まれた一夏がいた

その手にあるブレードも、雪片式型 へと姿を変えていた

「まさか、ファーストシフト！？貴方、まさか今まで初期設定で私と戦つていたのですか！？」

「そうさ、そのために俺が時間稼ぎの作戦を立てたのさ」

「待たせたな、月光！」

新たな姿で俺の隣に並ぶ一夏

「約三十分か、結構掛かったな」

「そんな・・・じゃあ私は貴方達の作戦にまんまと引っかかったといふことですのー！？」

「まつ、そういうことだ。 つーわけで一夏もやつとまともに戦えるようになったところで、俺も行くぜー！」

「なー？、貴方もなにがあるんですかー？」

「ああ、見てなー！これが俺達の力だー！」

俺は腰のカードケースからまた一枚抜き出す

「別のカード・・・？」

「いくぜー！ ブレイブ！ 砲鳳竜フュージク・キャノンー！」

そう叫ぶとカードが光りだし姿を変え、それに描かれていたフェニック・キャノンが現れた

「何ですのそれは！？」

それに答える代わりのようにブルーティアーズの残りのビットを背中のキャノン砲で破壊した

「なつ！？」

『邪魔者は消した、あとは本体だけだ、いくぞ月光！』

「「しゃ、喋つた！？」」

フェニック・キャノンが喋つたことに一夏とオルコットだけでなく見ていた筈や先生達も驚いていた

「ああ、来い！フェニック・キャノン！－！」

そしてフェニック・キャノンは姿を変えて翼とキャノン砲になると月光の背中に合体した

「合体した・・・」

「これが、俺達の力！合体だ！」^{フレイウ}

そつと俺はオルコットを見て構える

「さあ」

一夏も雪片式型を構えた

「これで終わりだ！」

俺と一夏は同時にオルコットに突っ込んだ

新生活編 ブレイヴ（後書き）

やつと月光を戦わせることができ、ブレイヴも出すことができました
次回は決着、そしてあの人ガ・・・

VSセシリア決着です

そしてついにサブタイトルの人気が・・・

「はああー。」

「ぐつー。」

俺が放ったキャノン砲の銃弾をオルコットはかるひじてかわす、だがそこに一夏が突っ込む

「つおおおー。」

「ぐつ・・・あやあー。」

ライフルで受け止めるが一夏の姿を変えた武器、雪片式型の威力に吹き飛ばされる

「そこだあー！」

すかさず俺がキャノン砲を放つ

「ここのー。」

だがライフルの銃弾に相殺された

「防戦一方だな、オルコットは」

それを見ていた織斑先生がそう呟く、それに篝が相槌を打つた

「ええ、一夏のエスがファーストシフトを終え、まともに戦えるようになつたとはいえ、ここまで一方的なのは・・・」

「ああ、風間のあのエス、カードが武器になつたりエスになるなんて・・・聞いたことがないぞ」

そう一人が話している間に戦つていた三人は動きを止め、対峙していた

「流石、代表候補生は伊達じやないつてことか」

「そちがいじや、じつやら私は貴方達を甘く見すぎていたようですね」

「やうかい、そりやじつも」

「でも、そろそろ決めますわよー！」

そう言つてライフルを構える

「ああ、じつも行くぞー！」

一夏が武器を構え、俺もキャノン砲の銃口を向ける

そして一瞬の沈黙が流れた後

「はああー！」

「行つけえ！」

俺達は同時に放った。お互いほとんどのエネルギーを込めた一撃はしばらくぶつかった後相殺され辺りに煙が舞うそこに一夏が加速して突っ込む

「うおおおおおおおー」

「なつー!?」

煙が晴れる前に現れた一夏に反応できずオルコットは攻撃を受け、ブザーが鳴り響いた

『勝者、織斑一夏、風間月光』

「よし、勝った!」

煙が晴れるとそこには氣絶したオルコットを抱えた一夏がいた

俺は控え室へ戻った、一夏はオルゴナイトを医療班に任せてから戻る
との」と

「ふう、疲れた」

「なかなかやるな、お前」

戻つてくると簫と織斑先生と山田先生が待つていた

「だが時間を掛けすぎだ、お前の実力ならもつと早く倒せたであろ
う」

「いやー、でも一夏のファーストシフトってやつを済ませたかった
ですし、それにああいう決め方の方
がかっこいいじゃないですか」

「馬鹿者、戦いにかっこよさなど必要ない」

怒られてしまった

「でも本当にお疲れ様です、風間君」

「ありがとうございます」

そんなやり取りをしていると一夏が戻ってきた

「よつ、とと」

「お疲れさん」

「ああ、勝つたんだよな、俺達」

「おお、お前が決めてな」

「だがあ前は機体と風間に助けられすぎだ」

「うわ、厳しいな千冬姉」

「織斑先生と呼べ」

「出席簿で叩かれる一夏、てかどこに持つてたんだ・・・？」

「お前の最後の一撃、あれは大量のシールドエネルギーを消費する
ものだ。風間がお前を守つてなければ刃が届く前にエネルギーが
尽きて負けていただろうな」

「そうだったのか・・・」

「とはいえ、お前らの勝ちだ。よくやつたな」

最後に織斑先生が俺達に賞賛の言葉を贈った、一夏は信じられない
ものを見るような目で織斑先生を見ていた

「それで、どうするんだ？」

唐突に籌が尋ねてきた

「なにがだ？」

「お前ら一人が勝ったんだからクラスの代表は一人のビッちかになるんだろう?」

「「あつ・・・」

そういやそんなことあつたっけ、すっかり忘れてた

「ビッする?」

一夏が聞いてくる、しじうがない、ここの漢の真剣勝負・・・

「じゃんけんで決めよ!」

「「ええ・・・」

一人だけでなく、織斑先生や山田先生にも呆れられてしまった

「……つてのが俺がISを動かした経緯つてわけです」

「織斑先生に俺のHSについて聞かれたので一夏やも纂いる中説明した
たしか」コースでもよく取り上げられてたよな、ISを動かして
強盗を倒したつてやつ」

「んで、HSからがHSのことだ」

そう言つてカードを取り出す

「HSはバトルスピリットで言つカードゲームのカードで今
HSになるのはHSだけだ」

「これが、月光のHS……」

「未だに信じられないな、こんなカードがISになるなんて」

『こんなカードとはなんだ、こんなカードとは』

「「え？」」

一夏と纂は突然聞こえた声に上を向く。そこにはカードに描かれ
ていたスピリット、ストライク・ジーク・バルムがいた

「「…………え…………」」

『なんだ、化け物でも見たような声を上げて』

「いや、せり驚くだ。こきなり出でたら」

「げ、月光、ここはいつたい？」

「ストライク・ジークバルム、俺のHSで俺の相棒だ」

『へいじく』

「あ、ああ・・・」

「い、こちら一ノア・・・」

戸惑いながらも答える一夏と篠、そして千冬は

「全く、お前には驚かされるな・・・で、あの合体したキャノン砲についても話してもらおうか」

「ああ、はい。あればプレイヴと言つてスピリットに合体する」と真の力を發揮するものです」

「せうこやあこつもしゃべつてたよな、ええつと、なんていつたつけ？」

『フェニック・キャノンな』

「そつそつそれ・・・つてまた出た！」

いきなり出てきたフェニック・キャノンに一夏が盛大に驚く

「まあこのよつてプレイヴもスピリットと回じよつて自我を持つて、他にも後一體いる」

「その一體も合体するのか？」

「ああ、ブレイヴによつて能力や形状違つ。分けるのもバトスピと同じで重要なんだ」

「なるほど、なかなか興味深い話が聞けた、風間、もう戻つていゝぞ。しっかり休養を取つておけ」

「はい」

織斑先生はそう言ひ行つてしまつた、さて、俺も戻るかな

「んじや、俺は戻るがお前らはどうする？」

「ああ、俺達も戻るよ」

そして俺達も寮へと戻つていつた

状況でブレイヴを使

月光達の戦いが終わり、それぞれが自分の部屋で休んでいたそのとき、別の次元では一人の少年が田覚めようとしていた

・・・起きて・・・ダン・・・

(マギサ・・・?)

自分を呼ぶ声に田を覚ます

「ハハ・・・ビード・・・?」

彼は見慣れない場所にいた。浮いているような、沈んでいるような、不思議な感覚だった

「ダン・・・」

呼ばれて振り返るとそこには懐かしい人物がいた

「マギサ……せっぱつマギサだつたんだな

かつてこの少年と旅をし、共に世界を救つた大魔法使い、マギサ

「久しぶりね、ダン

「マギサがいるつてことね」マグラン・ロロか？」

「いいえ、ここはマグラン・ロロとはまた違う別の世界。 あなたの力を必要とする世界よ」

「俺の……力……」

「ソレであるじとを想い出す

「マギサ! 未来は、未来は救われたのか! ?」

「ええ、ダンのおかげでみんな助かつたわ」

「そうか……よかつた」

未来の人達や仲間達の無事を確認してほつとする

「ダン、あなたにはまた世界を救つてもらいたいの」

「俺が……?」

「ええ、あなたと……スピリット達でね」

そう言つと彼のデッキケースが光りだした

「これは・・・！」

「ダンの新しい力よ、その力での世界を邪悪から救つて
そしてマギサは少年から離れていった

「待つてくれ、マギサ！..」

「あなたならきっとできるわ・・・頼んだわよ、馬神 弾

その瞬間、ダンの意識は途切れていった

やつと出せたぜ、ダン！

月光達と絡むのは次々回辺りにならうですが

新生活編　出会い（前書き）

新生活編完結です

「といつひとで一年一組の代表は織斑一夏君に決定です」

ただいまホールルーム、山田先生が昨日の決闘の結果とかもうもうを伝えた後、代表が一夏になつたということをみんなに伝えた

「ぐわ・・・あやこでグーを出してれば・・・」

結局呆れられつつのじゃんけんの結果は俺の勝ちとなり一夏に代表を押し付け・・・もとい託したのであつた

「はつはつはー頑張れよー、一夏」

俺がそう言つと回つもがんばれーとかいろいろ言い始めた

「というかオルコットはいいのかよ、男が代表なんてとか言つてたんだし」

「私は辞退しました」

一夏に聞かれるとオルコットはそう答えた

「思い返せば少し大人気なかつたですし、私はお一方との勝負に負けました。 ですので代表は辞退することにしましたの」

「そういうや俺も馬鹿にされたとはいひ少し言つて過ぎた、悪かつたな

オルコット

オルコットが言つた言葉に便乗し俺もこの間のことを謝つた、それに便乗するよつこ一夏も謝罪した

「ああ俺も、すまなかつた」

「こ、もつ氣にしないでください。それにオルコットなんて堅苦しい呼び方ではなく気軽にセシリ亞とお呼びください」

「わつか、んじゃ改めてよろしくなセシリ亞、俺も月光でいいぜ」

「はい、よろしくおねがいします、月光さん」

「俺も、一夏でいいぜ、よろしくなセシリ亞」

「は、はい。よろしくおねがいします、い、一夏さん・・・」

・・・ん?俺のどきどき反応が違つぞ、もじやいこつ・・・

「お前ら、今はホームルーム中だ、私語は慎め」

おつと我等が担任様に怒られてしまった

その後山田先生が連絡事項等を伝えてホームルームは終わった

そつとつとてとてと走つ去つていつた、そして俺は一夏の元に

「うそ、やいじくね~

「なるほど、んじゃ明日は予定入れないよつとくわ

おつむー・・・ああ一夏か

「聞いてるの

「明日おつむーの代表就任お祝い会を開くんだ、それでみんなに

「ああ、暇だけどなんで?」

「明日放課後ひま~?」

昼休みになり学食にでも行ひしていると布仏

本音（みんなか

らばのほほんと呼ばれている）が話しかけてきた

「ん?」

「うーん~」

「一夏、セシリ亞との決闘は終わったわけだが放課後の特訓はこれからも続けるか？」

「あー、どうすっかな。やっぱ白札も使こしなせぬか？」
いた方がいいよな・・・」

一夏は少し悩んでから少しだけ答えた

「えいや、またしばらへ一緒に特訓すっか。 篓はどうする？」

自分の席で俺達の話を聞いていた篓に聞いた

「あ、ああそれなら私も付き合おう」

「じゃあ今からまだ今日の使用許可取れるだらからちょっと
へり行ってくれ」

「あ
頼む」

ついでにパンとも皿うかと考へ鞄から財布を取り出し叢雲室へ向か
つた

そして放課後、特訓のため着替えてアリーナに向かうと既に簾が待つていた

「早いな、簾」

「お前らが遅すぎるだけだ」

「あはは、めんぼくねえ」

そんな軽口を叩いていると突然空が光りだした

「なんだ！？」

見上げるとそこには光り輝く扉のようなものがあった

「なんじゃありや！？」

「おい、開いてないか、あれ！？」

その扉のようなものが開き、そこから何か降ってきた

「お、おいーあれ人じゃね！？」

「う、受け止める！」

今考えればエスを起動すればよかつたのだがパニックってた為二人で受け止めることに

「うわあ！」

「うおっ！」

「くつ！」

なんとか受け止めることに成功、ひとまず二人の安否を確認

「大丈夫か、二人とも」

「ああ、なんとか、筹は？」

「ああ、私も大丈夫だ。 それよりこの人・・・」

とりあえず顔を見る・・・つてこの人！

「う、ううん・・・」

「あ、気が付いた。 大丈夫ですか？」

目を覚ますと一夏が話しかける

「ああ、大丈夫だ。 君達は？」

「ええっと、俺は織斑一夏でこいつが筹ノ之筹、こいつは風間月光・
・・つて月光、どうした？」

おそらく今変な顔をしているであろう俺に一夏が聞いてくる、この人も俺を見た

「・・・馬神・・・弾?」

「へ?」

俺の言葉に氣の抜けた声を上げる一夏、だが今はそんなこと気にしている余裕はない

「・・・何故俺の名を?」

この人は驚いた表情をして聞いてきた、やつぱりそうなのか

「なんで・・・」に馬神弾がいるんだ・・・?」

これが俺と伝説のカードバトラー、「馬神 弾」との出会いだった

新生活編 出会い（後書き）

とつあえず新生活編終了です

次回からダンと月光達が絡みだします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9767x/>

IS・B ~インフィニット・ストラatos・ブレイヴ~ 新たな月光のバトラー
2011年11月26日21時50分発行